

「他にも亜丁に行きたいってヤツがいたら、俺に電話してくれ」彼は私に名刺を手渡した。やっぱりみんなと同じワンパターンの車の絵の名刺だ。名前のところには『次仁扎西』とあり「シャーレンザーシー」と読むのだと言った。彼はチベット族の人間なので、漢字は単なる当て字なのだろう。

亜丁までの車も決まった事だし、お腹がすいていた。外に出て行こうとすると、「どこに行くの？」と次仁扎西(シャーレンザーシー)こと運転手のお兄ちゃんが聞いた。

「食事に行くの」

「俺もまだなんだ。一緒に行くよ」

一見昭和のチンピラ風に見える彼は、話してみると割に人の良さそうな田舎のお兄ちゃんという感じだった。帽子を脱ぐと坊主頭で、浅黒い肌にグリグリした目のジャガイモみたいな顔だ。間延びした不明瞭な中国語は外国人の私が聞いても田舎なまり丸出しだった。私はといえば埃まみれの服を着た、髪ボサボサの若いとはいえない女だし、ナンパの下心がありそうにも思えない。食事は一人でするより二人の方が楽しいに決まってる。

「いいわよ」

すると彼がそこに停めてあった車のドアを開けた。

「じゃあ、乗りなよ」

うーん……。外はすでに夕闇が迫ってきている時間だ。知らない土地で知らない人の車になって乗っちゃっているのかなあ……。又しても、その思いは心をよぎったが、とりあえず今のところ私は彼の客だし、街の中心までは一本道で、車で3分とかからない。まあ、いいか。私は彼の車の助手席に座った。

念のために断っておくと、知人もいない海外で、私は誘われれば誰にでもついて行ってしまふ訳ではない。ちゃんと自分なりに状況や相手を判断して信用するかしないかは決めている。それは相手の発散しているオーラののようなものを感じる事だ。信用ならない人間は目を見ればだいたい判るし、体全体から警告を発しているのが空気を通して感じられる。もちろん彼は普通に街の食堂に連れて行ってくれた。

稲城の街の夜は早く、日が落ちたばかりだというのに大半の店はシャッターを下ろし始めている。何が食べた

いか問われて「水餃子」と答えた私のため、彼は律儀に、一軒一軒まだ開いている食堂の前に車を止めては「おい！水餃子あるか〜!？」と大声で尋ね、三軒目にちゃんと水餃子のある店を見つけてくれた。

考えてみれば朝も同じものを食べていたのだが、もちりした皮に包まれた餃子が暖かいスープの中に浮かんでいる水餃子は、急いでいる時には手軽だし疲れている時でもスルスルのどを通して、何度食べても飽きないしハズレがない。

運転手のお兄ちゃんが水餃子のほかに数品の料理を頼んで二人で分けて食べた。食堂の支払いは割り勘のつもりだったが、結局彼が支払ってくれてしまった。これじゃあ彼の商売は全然儲かりそうにない。

店を出ると、ちょっと買い物があるからと、お兄ちゃんは数軒先の雑貨屋に入っていった。彼を待ちながら既に夕闇につつまれた稲城の街をぼんやりと見回す。ここまで来ると街の中の看板も殆どチベットの文字で書かれている。

何処からかムツとするような血生臭いにおいが流れてきたのでフと見ると、私の立っている雑貨屋の脇の歩道でヤギを解体しているのだ。歩道のふちには切り取られたばかりと見られるヤギの頭が並んでいる。思わずギョッとしたが、これは庶民の生活の中で日常的に行われている普通の事なのだろう。そう思うとさほど残酷だとか気持ち悪いとは感じられない。商店街の真ん中でヤギの解体とはさすが山賊の街だ。

買い物を済ませて車に戻るとお兄ちゃんが聞いた。

「他に行きたいところはある？」

うーんと……それなら、「串焼きが食べたい」と私は言った。実はさっき食堂に行く途中、街角の暗がりにはテントが張られて串焼き屋が店を出しているのが車の中から見えていた。

中国では「串拷(チアツ・チア)」と呼ばれるその串焼きは四川省の名物なのか、今まで私が訪れた何処の街にも必ずあった。夕方暗くなり始める頃にどこからかやってきて、屋台の上に肉や野菜、豆腐、魚などさまざまな素材を串に刺した物をたくさん並べて店を出す。裸電球に照らされたそれらの中から、客は好きなものを選んで店主に渡す

とその場で焼いてくれるのだ。

塩、コショウに四川省名物の山椒の粉や、さまざまな香辛料のきいた味付けはたまたま美味しく、散歩の合間に二、三本買って歩きながら食べたり、成都の街ではビールケースの上に乗せたベニヤ板をテーブルに、風呂場の腰掛のような椅子に座って、宿で知り合った日本人の旅行者達とビールに串焼きで夜更けまで旅の話で盛り上がったものだ。松藩では広東兄妹や桂林女史とこの串焼き屋台を何軒もはしごして歩いたし、四姑娘山の麓の街でも登山メンバーとこの串焼きを買い食いしたのは楽しい思い出。暗い夜道で闇を照らす裸電球の光の温かみと夜風に吹かれて美味しい物を食べる楽しさは格別で、この屋台を見かけると私は素通りできなくなってしまうのだ。

運転手のお兄ちゃんは内心「ゲッ、まだ食べるの？」と思ったようだが、私が先ほど見かけたテントに連れて行ってくれた。

テントの中は口の字型に仕切られた客席の前に炭が熾してあり、真ん中に店主が座って客の差し出す串を焼いている。串焼き屋のテントは盛況で、先客でほぼ満席状態だった。他に夜の娯楽もなさそうなこの街で、この串焼きのテントは街の居酒屋のような役割をしているのではないだろうか。薄暗い裸電球と炭火の明かりに照らされている串焼き屋のお客達の顔はみんな楽しそうに見えた。私たちはかろうじて空いていたテントの隅を詰めてもらって並んで座った。

一番好きな羊肉の串焼きを二本取り、あなたは何を食べる？とドライバーのお兄ちゃんに聞くと、「満腹だから何も要らない」と言っていたが、そのうちにまん丸のジャガイモを揚げたのを一つ取り上げ、更に炭火でちょっと焼いて、

「君はジャガイモを食べないの？この土地のジャガイモは美味い事で有名なんだぜ」

と、口に放り込んだ。あ、ジャガイモがジャガイモを食べる。心の中でこっそり苦笑する。向かいに座っていたチベット服姿の年配の女性が、目が合うと笑いかけてくる。何か話しかけてくるが言葉がわからない。ドライバーのお兄ちゃんが「彼女は日本人なんだよ」と説明すると、頷いてまたニコニコ笑った。屋台はこの感じがいいんだよねえ……。二本の串焼きを味わって食べた。

「他に何を食べる？」

お兄ちゃんに聞かれたが、もともとお腹はいっぱいだったし、このテントに来られた事で満足していた。

「もう要らない」

と言うと、彼は

「気が済んだ？じゃあ、帰ろうか。明日は亜丁に行くんだし」

とサッサとお金を払ってテントから出てしまった。

ここでは私が払うつもりだったので、慌ててお金を渡そうとしても彼は受け取らない。なんだか悪い事しちゃったなあ。色々奢らせちゃった上に、ナンパどころか早く帰りたかったのは彼の方だったらしい。

青年旅舎まで送ってもらうと、明日の朝8時に迎えに来てもらう約束をしてドライバーのお兄ちゃんと別れた。

個室状態のドミトリーに帰ると、ホウッとため息がもれる。何だか今、自分が稲城にいるのがウソみたいだ。明日には亜丁に行かれるなんて。ここまですべて順調にきてしまった。初めはホンの二週間程度の旅行でみんなと一緒に日本に帰るつもりだった事を思うと不思議な気持ちだ。

さあ、亜丁に行くための準備をしなくちゃ。私はやにわに荷物の整理に取り掛かり始めた。山の中のキャンプ場に泊まるのだから、余分な物は少しでも減らしたい。不要な物は一つにまとめてこの宿に預かってもらうつもりだ。逆に亜丁で必要な物は忘れないようにしなくっちゃ。

慎重に荷物をより分ける。前回亜丁を訪れた時期より丁度一ヶ月遅れているので、高山での寒さが心配だった。ダウンのシュラフに、ダウンのパンツ。夜になれば電灯など無いのでヘッドランプは必需品だし、寒さに備えて四姑娘山の使い残りのホカロンは全部持っていこう。お湯を注ぐだけで食べられるアルファ米の携帯食に、パスポートとお金・・・お金？ え？ お金！？

思わず息を呑んだ。

「・・・うわーっ！！！！ お金が無ーい！！！！」

そう。この時、私は大失策を犯していた事に気がついたのだった。

【次号に続く】

